

ルカ 19:1-10

19:1 それからイエスは、エリコに入って、町をお通りになった。 19:2 ここには、ザアカイという人がいたが、彼は取税人のかしらで、金持ちであった。 19:3 彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見るができなかった。 19:4 それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。 19:5 イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」 19:6 ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。 19:7 これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行って客となられた」と言いつぶやいた。 19:8 ところがザアカイは立って、主に言った。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」 19:9 イエスは、彼に言われた。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。 19:10 人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」

20 世紀を特徴づけるもののひとつに、多国籍企業と企業スローガンや企業理念の増加が挙げられます。日本でテレビを見ていても、会社や商品を宣伝する歌や決まったフレーズのようなものがあります。この「理念」を正しく用いるとたいへん効果的です。私は教師ですが、教師もひとりひとりが生徒をやる気にさせるような理念を持っていなければなりません。ほとんどの場合、「やる気を引き出す」というような言葉が含まれています。これほどに理念というものが浸透したのは、理念が私たちの行動の根拠となり、ぶれないようにさせてくれるからだだと思います。存在意義を明確にしてくれるのです。

では、イエスの理念は何だったでしょう。イエスの行動の根拠は何でしょう。その答えは、今日の聖書箇所 10 節に記してあります。「人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」避けることのできない根本的なキリスト教のメッセージは、救いという概念です。これはキリスト教独特のものです。自己啓発や社会向上のプロジェクトではありません。救い（救われること）とは、福音の一部です。ここにいるクリスチャンの皆さんは、きっとたくさんの人と救いについて話したことがあるでしょう。クリスチャンでない人も、イエスの話が出てきたときにそのことを耳にしたことがあるでしょう。

この発言はよく知られたことばです。しかし、ルカの福音書の随所にあらゆるかたちで記されたこの言葉は、少し説明を要します。これはどういう意味でしょう。また、ルカはここで、10 節の発言が何をあらわしているかを示してくれます。今日の聖書箇所から、イエスの理念について 3 つの事柄を学びます。まず、イエスが失われた人を探しておられること（今日はこれを救いの範囲と呼ぶことにしましょう）、次にイエスが失われた人を救われること（これを救いの喜びと救いの実と呼びます）です。では最初に、救いの範囲について見ていきましょう。

I. 救いの範囲と物議:

- a. さて、私たちの罪のはかり方は間違っている可能性があるかと先週学びました。これと同じように、失われた人とは誰かという私たちの定義も間違っている可能性があります。赦しを受けるべき人は誰かという自分なりの考えが、聖書に記された内容の理解を鈍らせます。今朝ここにいるクリスチャンの人は、赦しを理解していると思っていますでしょう。しかし、神の赦しという概念に賛同していながら、行いはそ

の信念に伴わないという状態になりやすいことを私はこれまでの経験から理解しています。

- i. これについては、ルカの福音書の随所で取り扱われています。イエスがご自身の使命をはっきりと述べられても、人々はそれを誤解しました。エリコの人々も例外ではありません。7節には次のようにあります。「これを見て、みなは、『あの方は罪人のところに行って客となられた』と言ってつぶやいた。」先週のシモンも、イエスに触れたのが罪人の女だといって心の中でつぶやきました。今日の聖書箇所の人々も、イエスが罪人の家に行くのを知ってつぶやきました。「あの人と仲良くするなんて、イエスはこういうつもりだ」と言っていたわけです。
- ii. では、これを理解してみましょう。なぜ人々はつぶやいたのでしょうか。
 1. 端的に言うと、ザアカイが取税人だったからです。この箇所を読んだことのある人は、当時の取税人の役割についてもきっとご存じでしょう。
 - a. イスラエルは当時、ローマ帝国の占拠下にありました。つまり、税金は皇帝に支払います。しかし、これは内国税ではありません。ザアカイが取り立てていたのは、「みかじめ料」のようなものです。政府が統制するシステムというよりは、暴力団が「金を出せば何もしない」といって要求する用心棒代のようなものでした。
 - b. また、ザアカイはただの取税人ではなく、取税人のかしらでした。余談ですが、この言葉が聖書に登場するのは、このたった一個所です。同胞のユダヤ人は、ザアカイのことを、エリコにはびこる恐喝というクモの巣の真ん中にいる悪いクモのように思っていたでしょう。ザアカイは、ローマ人の味方をしているので権力を持っています。そして、人々をだまして上前をはね、大金持ちになりました。彼は明らかに、不正行為を働いて、成功した人でした。
 - c. イエスがなさったことを見て人々が腹を立てた理由が分かりましたか。
 - b. 人々は、福音の物議と直面しました。彼らは、イエスがザアカイのために来られたという事実を受け入れられませんでした。彼は自ら進んで、イスラエルの人々からお金を奪い取り、人々に害を加えていた人です。イエスは、イスラエルの人々の王となるために、主であり救い主として来られたはずのお方なのに、イスラエルの人々に積極的に害を加えていた人の客となることをよしとなさったのです。人々は、ザアカイが同情を受けるに値しないと思っていました。
 - i. 私たちも、誰が同情に値するかという自分なりの考えを基準に、「失われた人」についての定義を限定してしまう傾向があります。例えば、しいたげられた人や虐待を受けた人など、切羽詰まった状況にある人たちです。しかし、それは全体の一部分でしかありません。福音の包括性を私たちは思い起こさなければなりません。イエスはもちろん、しいたげられた人やひどい扱いを受けた人のために来られました。しかし、救いの物議とは、イエスがそういう人たちのためだけに来られたのではないということです。イエスは、人をしいたげたりひどい扱いをしたりする加害者のためにも来られました。「失われた人」に対するイエスの定義がどれほど広義であるかわかりましたか。
 - ii. 皆さんがこれまでに福音を分かち合った人たちのことを考えてみてください。その中に、あなたが愛情を持てないような相手は何人いたでしょう。プライドが高くて偉そうで、誰からも敬遠されるような人に福音を分かち合いたいと思いますか。詐欺行為など、人の道に反することをしている人に対してはどうでしょう。他人を利用するような人はどうでしょう。

1. 三菱自動車による燃費データ不正問題をみなさんはどう思いましたか。三菱自動車が金儲けのために燃費データを改ざんしていたというニュースは、国内外で大きな波紋を呼びました。このような大企業が営利目的で真実を隠した事件に対し、私たちは怒りや失望を感じます。それは、群衆がザアカイに対して抱いた感情と通じるものがあります。そしてイエスは、人々からつまはじきにされたこの金持ちの友となられたのです。
- iii. 誤解しないでください。神は、貧しい人や困っている人に対する不当な仕打ちをご覧になります。そして、いつか必ずそれを正されます。しかし、神がイエスをこの世にお遣わしになったのは、すべての失われたたましいを捜して救うためです。救われるべきだと私たちと思う人たちのためだけではありません。情け容赦を受けるに値しないと思われる人たちをイエスが御国に迎え入れたいと望まれたら、私たちはそのことを心から喜べますか。それが福音の物議です。

ですから、救いはすべての人に開かれていることを認識する必要があります。私たちが不快に思う人や同情を受けるべきではないと思う人に対してもです。これはとても力強いメッセージです。イエスに手を差し伸べられない人はいません。同時に、この箇所は、イエスが失われたたましいを捜して救われることの意味について非常に尊いことを教えてくれます。では、救いの喜びについて学んでいきましょう。

II. 救いの喜び:

- a. この箇所には、イエスが自分を求めてこられたと人が認識したときにどんなことが起こるかがつぶさに記されています。6 節や 8 節のザアカイの喜ぶ様子を見てください。彼は大喜びでイエスをお迎えし、自分の財産を施すときには「主よ、ご覧ください」と言っています。まるで小さな子が「パパ、見て!」と注意を引こうとする姿のようです。すべきことをするにとどめておくこともできたでしょうが、ザアカイは喜びに満ちていました。なぜそんなにうれしかったのでしょうか。「イエスに出会ったから」と言って片付けるのは簡単ですが、それ以上のことが言えます。
 - i. ザアカイの背が低かったことや、いちじく桑の木に登ったことを、なぜルカがわざわざ 3-4 節で指摘したのかと思ったことはありませんか。そんなことを取り立てて書くのも奇妙に見えます。
 1. ルカは、人々がザアカイを嫌っていたことを強調したかったのでしょうか。ザアカイは欲深いせいでよけ者になってしまいました。町の人々は、イエスのことが見えるようにと彼を前に行かせてあげようとしません。自分より背の低い人が前に行けるようにしてあげるのは、それほど大したことではないはずです。しかし、イエスは群衆をかき分けて、ザアカイのもとへ来てくださいました。
 - ii. ザアカイはイエスに対して喜んで応答します。それは、彼があることに気づいたからです。ザアカイの家に行くとおっしゃったことで、イエスは群衆から軽蔑のまなざしを受けました。人々がザアカイを心底嫌っていたことは、イエスを見る輪にザアカイを入れなかったことや、イエスが彼の家に行かれると知って文句を言ったことからよくわかります。しかしイエスは、ザアカイを救うために、非難も嫌悪も受け入れたのです。ザアカイは十字架について聞いたこともありませんでしたが、こんなに喜んでいました。
 1. イエスが私たちの友となり救い主となられるためにどれほどのことに耐えられたかを知る私たちは、それ以上に喜ぶべきではないでしょうか。イエスは、私たちの罪に対する神の嫌悪も、私たちの墮落に対する神の非難も負われたのです。
- b. ひとりひとりのために

- i. ここで、福音はひとりひとりのためにあることも示されています。ザアカイのもとにきた救いがどれほど個人的なものであったかご覧ください。1 節からは、イエスがエルサレムの途上でエリコを通過されただけのように見えますが、実際には、ひとりの人を求めておられるのです。
- ii. イエスは、「あなたの家に泊まることにしてあるから」と言ってそのことを強調なさいます。イエスにとって、救いは行き当たりばったりではありません。ご計画済みのことなのです。イエスはあなたの家を訪れることにしておられます。あなたに会うことにしておられます。そして、あなたをご自身のものにすることにしておられるのです。
 - 1. 結婚や交際関係のすばらしいところは、あなただけということではないでしょうか。たくさんの中から、あなただけを求めてくれた人があなたの相手です。そして、物のようにではなく人として興味を持ってくれたのです。私たちの場合、相手に何か素敵などところを見つけるからそうなります。しかし、福音のすばらしいところは、神があなたをご覧になり、神が必要なものもなければ、素敵などところもないのに、あなたを選んでくださることです。神があなたをご覧になって、「わたしはあの人をわたしのもとに導くことにしてある」と言ってくださるのです。

とは言うものの、ザアカイは本当に変えられたのかと疑う人もいるでしょう。そこでルカは、ザアカイがイエスによって救われたことが彼の生き方にあらわれることを示してくれます。つまり、救いの実です。これが、今日最後のポイントです。

III. 救いの実:

a. ザアカイから現れた実は、気前のよさと喜びでした。

- i. 人々を圧迫していた人が、祝福の器となりました。彼は人々から搾取していましたが、今度は人々に財産を惜しみなく分け与えました。
 - 1. ザアカイは、すべきことをするだけでもよかったのです。ここでザアカイは数字を並べています。旧約聖書の基準では、捧げ物は十分の一ですが、彼は半分を施すと言いました。また、誰かからだまし取ったものの償いは 1.2 倍にして返すのが基準ですが、彼は 4 倍にするとしました。
 - 2. ザアカイにとって、お金とそれに伴う権力は彼のすべてでした。それが彼に安心と人々を支配する力を与えていました。ここで彼は、その力を放棄しているのです。
 - 3. このことから、私は示されました。私が十分の一をささげはじめたのは、仕事を与えられていることを心から感謝していたからです。けれども、無理のない額だけをささげました。犠牲的にささげる覚悟はできていませんでした。それは、お金が自立や快適さ、そしてあらゆる機会の象徴だからです。お金は力の象徴です。イエスが力と快適さを私のために捨ててくださったことを、私は忘れていました。イエスがそうしてくださったおかげで、私は何より大切な慰めと力と安心を得ることができたのです。ザアカイのように、私の気前の良さの度合いが、福音をどれだけ理解しているかをあらわします。ささげて弱くなることを拒むのは、キリストにあることこそが本当の安心と力であることを信じ切れていないからかもしれません。
- b. 最後に、ザアカイが気前ようになった順序は、基督教のメッセージの独自性を物語ります。5 節と 9 節には関連性があります。それは、救いが私たちのところにやってくるということです。私たちが救いを自分自身にもたらすではありません。
 - i. 自分の生き方を整えてイエスが「愛している」と言ってくださるのを待つではありません。イエスがまずザアカイに「愛している」と言ってくだ

さいました。それで心が変わったので、彼の生き方が変わりました。それが本当に変わったとわかる唯一の方法です。神に愛してもらおうと生き方を変えるのなら、それは究極の自分本位です。神が愛してくださったから生き方を変えるのなら、それは生まれ変わったからです。確かな証です。

- ii. ティム・ケラー師は、キリスト教の救いがどのようなものかについて大切なポイントを指摘しています。他の宗教における救いは過程です。自分が何をするかということです。ですから、いつまでたっても十分という確信が得られません。また、十分何かをできたということはありません。ロンドンでイスラム教徒の人たちと働いたことがあります。彼らに、イスラム教の救いについてよく尋ねました。答えはいつも「インシャアラー、天国に行きます」というもので、「神が望まれば入れる」という意味です。謙虚な言葉に聞こえるし、神との関係性はすべて自分の生き方次第だという考えなら理にかなった答えでしょう。仏教では、瞑想を重ねて煩悩を減らして心をきよめると悟りを開くと言われます。
- iii. しかし、イエスの救いはそういう方法ではありません。今日の個所でイエスは、「救いがこの家に来ました。」とおっしゃいました。それは、イエスがこの家に来られたからです。イエスが救いそのものなのです。イエスは救いをもたらされるだけではありません。今日ここにいるクリスチャンの皆さんは、神のために十分良いことができているかなどと疑問に思う罫にはまってははいけません。私たちは、自分のたましいについて、「救いがこの家に来ました。」と確信を持って言うことができます。傲慢だと言われるかもしれませんが、それは十字架を誇ることだと聖書は語ります。
「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあつてはなりません。…」(ガラテヤ 6:14) 私たちは十分良い人ではなかったけれども、キリストが十分良いお方であったということを楽しむのです。キリストは神の目から見て十分に良いお方でした。私たちが救われるのは、ただこのお方のおかげです。